

提言：社交都心—21世紀版大阪の”都心の磁石”—

1. 問われる都市の行方

[問題意識]

- 我が国の都市は、情報化、国際化、少子高齢化等の社会経済の急速な環境変化の中にある。
- 我が国の周辺では、新興都市が急成長しており、都市のあり方を国際的生存競争としてとらえる。
- 都市の魅力と国際競争力を高めるための、中長期的展望をもった21世紀型都市再生について、具体的処方箋は未だしである。
- 関西都市圏でも「都市再生」の取り組みが進み、大阪でも、大阪駅北地区、中之島線、難波駅周辺などのプロジェクトが促進されているが、必要なことは、30年～半世紀を見据えた未来予想図を描くことである。
- 関西都市圏は、行財政の逼迫や経済界の活力低下など疲弊、弱体化しつつある。眼前のことだけで精一杯で、中長期的将来像が語られていない。これを打開すべきである。

2. 岐路にある都市—様々な都市論の登場

[21世紀をめざすべき都市のあり方]

—21世紀都市論の二大潮流 覇権型世界都市と文化・創造型ローカル都市—

- グローバル化の中で生存競争を勝ち抜く「覇権型世界都市」と、都市で活動する人を主軸に文化と魅力ある都市を実現する「文化・創造型ローカル都市」という2つのコンセプトがある。
- いずれの型の都市の場合も、次代を支える新たな産業は情報やコミュニケーションなど人に深く依存する。21世紀の源泉は「人」であり、その活性化をはかるインフラが生活空間としての都市である。

3. 挑戦する都市—各地の試み

[世界・日本の各都市の21世紀都市をめざす事例]

(1) ロンドン、パリの都市戦略

<ロンドン>

- 英国病の中、都心の空洞化に対し民活プロジェクトを推進。近年も、新たな文化・集客施設や金融機能、住宅が集積し、クリエイティブな人材が集まる。2004年には、2012年オリンピック誘致を成功させ、マスタープラン「ロンドンプラン」を発表。都心の公共交通や住宅へ積極投資し、職住近接型の都市を目指す。

<パリ>

- 89年計画のシャン・ゼリゼの再生プロジェクトにより賑わいを取り戻す。最近では、パリ・プラージュ（海岸の意）イベントや一晩中の建物ライトアップ、建物壁面での

屋外映画上映など、ソフト型の文化・集客プロジェクトを推進

(2) 各都市の都心再構築に向けた試み

- 六本木ヒルズ：垂直田園都市とサロン
- 横浜市ナショナルアートパーク構想：都心と水辺をつなぐ文化軸
- サラゴサ：「水」をテーマにした万博を契機に都市再生
- バレンシア：水辺空間づくり、水上の芸術科学都市
- シアトル：高架の地下化、市民合意
- ソウル：清溪川再生事業（水辺を軸にした都市づくり）
- 日本橋：水辺の徹底的再生、水辺を軸にした都市づくり、連携

4. 社交都心—21世紀版大阪の「都心の磁石」

[21世紀都市としての大阪のすすむべき方向]

(1) 21世紀型都市が目指すもの

- **都市の本務「情報の加工と発信」に立ち返る。**
重厚長大型の産業を都市近傍に配置する20世紀の都市から、都市活動の本質ともいえる情報とコミュニケーションに集約された都市本来の姿に回帰する。
- **都心が21世紀都市の心臓部**
機能と効率重視のゾーニングを改め、都心そのものが創造的人材が惹き付けられる場として、職住近接やミックストユースなど複合的機能を備えた21世紀型都市のインフラとなるべき。
- **文化を基盤とする都市**
- **人間にとって魅力的な都市**
- **迎え入れる包容力ある都市**
世界中から人々が集まり、それを受入れる包容力を備える。
- **選択と集中により都市空間を再生**
限られた資源を有効に利用し、都心での文化振興や都市空間の再整備など必要などころには投資を惜しまない選択と集中が欠かせない。
- **世界レベルの都市間競争と向き合えるローカル性を具備・表現**
グローバル化とともに、景観、伝統的都市空間、歴史文化資源の保全、自然環境の再生などローカルアイデンティティを高めることが必要。大阪都心ならば「水都」。
- **都市圏レベルのネットワークがポリセントリック（多中心）**
多様な文化的特性を備えた関西の主要都市間を交通ネットワーク（大阪では中之島線や阪神西大阪線延伸、都市再生環状道路など）で強化し、人や情報の交流面でもポリセントリックな構造をもつ。

(2) 大阪の目指すもの「社交都心」——21世紀版”都心の磁石

社交都心 Sociable City , Forthcoming Cityとは

情報の加工と発信に関わる“人”の創造的行為すなわち、遊び、愉しみ、出会い、交流といった人々の暮らしを構成するアクティビティ＝「社交」。

21世紀型都市像を語るには、従来の“機能”から考えるのではなく“考え方の手順”を逆にする。まず“社交”ありきの都心があり、その社交空間に、働く場、住まう場などの“機能”が付随する。

覇権型世界都市と文化・創造型ローカル都市の両方の側面も兼ね備える大阪で、両者の長所を生かし短所を打ち消す新たな都市のコンセプトを打ち立て、その中心に「社交」を都心の磁石として据えた21世紀都市の目標像を立てることが適切である。

5. 大阪都心の未来

[大阪都心の具体的な未来像を考える]

(1) 関西都市圏

[関西における大阪の位置づけ]

モノセントリック型の東京都市圏に対し、ポリセントリック型の関西都市圏。歴史文化の蓄積などの特徴を生かし、東アジア、日本全体、関西、京阪神といった重層的な空間構造のもとで、各都市の連携を視野にいたした都市圏構造のあり方と成熟型社会を展望したコンパクトな都市構造の両立をはかる。そのなかで大阪都心の果たすべき役割を位置づけていくことが重要となる。(国土計画、広域地方計画でも検討中)

(2) 大阪 【現状の問題点】

- 経済問題：中核部分の企業本社の流出、重厚長大産業や繊維産業や卸売業の衰退。反面、次世代成長分野が十分育っていない。
- 都市空間問題：都心回帰がもたらす住機能と業務・商業機能の混在による混乱や小中学校などの教育施設の不足の懸念。公共空間の貧弱さ。文化施設集積の少なさ。河川や水都のイメージが希薄化。
船場・本町などかつての都心部の活力が落ち、一方梅田や新大阪周辺などには新たに大量のオフィス床供給が進み、都心機能の分散化と活力低下を招くことも懸念される。
- こうした状況に対応すべく、大阪駅北地区再開発地域のナレッジキャピタルなど様々な都市再生に向けた取り組みが進められているが、大阪の都心部を21世紀都市として再構成するような流れには至っていない。

(3) 21世紀都市としての大阪を展望して取り組むべきこと

1) 社交都心を編集する

“社交都心”の実現を目指し、都市全体の未来の姿を見据えて個別プロジェクトを誘導し、協調して21世紀都市を築く「都市の編集力」が重要

2) 21世紀大阪の都市構造を見直す 【Shift The Center of Osaka】

—大阪の中心を西にシフト—

戦前に東西軸に南北軸を挿入してつくられた東西・南北の十字型ネットワークを発展させ、更にアクセス性の高いポリセントリックなネットワークを志向するため、未来の大阪の都市構造を展望したとき、「大阪都心の中心を西にシフトして考える」ことが適切。即ち、大阪の「社交都心の中心としての条件をみたす場所」としては、現状の御堂筋（南北軸）

と中之島東部（東西軸）が交差するあたりから、やや西方にシフトして考えることが適当であると思う。

3) 編集の核となる場づくり

[社交都心の中心としての場所的条件]

- 次代を見据えた重層的都市構造のノード（結節点）
- 開発プロジェクト実現の余地があること。都市再編のためのトリガーとなりうる再開発が可能、特に未活用の公有地や低未利用地など
- 海・河川など水辺空間の魅力を生かせる
- 多様なアクティビティを誘発しうる機能や空間が複合的に集約されている。

こうした条件を満たしうる場所において、文化・芸術、創造的産業、豊かで個性的な人々の暮らしを実現しうる象徴的な場所をつくりあげることができる。

6. エリアスタディ：Greater Nakanoshima

【社交都心大阪の実現に向け、“中心を西にシフト”して、具体的な都市の編集力を高めるエリアスタディとして最適の条件を備える「中之島西部周辺を核とした周辺地域」をとりあげた。】

—中之島：中之島がなぜ社交都心にふさわしいか—

- 大阪の東西軸と南北軸の結節点に位置し、また、広域交通ネットワークの結節点として高いポテンシャルを持つ。海辺に近接、河川に囲まれ、水都大阪の象徴となる。臨海部に位置するUSJや都心観光をつなぐ位置にある。
- 海辺に近接、河川に囲まれ「水都大阪」を象徴する。
- 中之島線の整備や中之島西部地区の再開発など、都市再生の取り組みが今後最も活発に進んでいくことが期待され、都心のなかでも貴重な発展余地がある場所である。また、中之島は都心の中でも大区画の敷地で構成される貴重な地域
- 文化の拠点として、大阪都心では数少ない文化・芸術の拠点が集積する。
- 地元地権者などによる「中之島まちみらい協議会」が、都市ビジョンを策定するなどガバナンスの強化にも積極的である。
- ゲートウェイとしての大阪駅北地区、伝統的な都心の淀屋橋、船場周辺とも接する要衝の地。

— グレーター中之島（狭義の中之島だけでなく周辺を含めた一体エリア）として —

本エリアスタディでは、社交都心を編集する場所として、中之島西部周辺を核としてその周辺一体の広い範囲を「グレーター中之島」と位置づける。その理由は：

- 現在中之島は大阪都心部の都市再生緊急整備地域では西の縁辺に位置し、プロジェクトもそこに集中しているが、21世紀の都市大阪の更なる発展のためには、都市再生の取り組みが西方などに順次広がるシナリオが求められる。従って、中之島が「縁辺」としてではなく、次代の都市構造の「中心」として描かれる必要がある。
- 多様な人々のアクティビティ、多様なライフスタイルを実現しうる濃密な機能が集積する場所を構想するには、中之島のみでその範囲を限定しない方がよい。また、社交都心を支える良好な都心住環境が近接していることも重要である。

(1) 社交都心としてのグレーター中之島 (コンセプト)

[今後求められるコンセプトの提案]

社交都心としての資質が大いに期待されるグレーター中之島を社交都心として編集していくコンセプトとして以下の3つを提案する。

① 水都計画 一水を徹底的に生かす都市計画

水を徹底して生かした都市空間の構築を中心に据える。

水辺を軸にした都市空間の整備：河川沿岸部（堂島川、土佐堀川、木津川、安治川）での都市からアクセスしやすい水辺歩行者ネットワーク・川に向かって建つ美しい建築物群・水辺での多様なアクティビティを実現しうる滞留スペースや広場など・都心の水辺に人々が集まる魅力あるフットパスとしての歩道橋ネットワークの充実・河川から引き込まれた舟溜まりや運河ネットワークを新たに構築（これらは、水活用の地域冷暖房や防災問題として地下水水位上昇のコントロール、船着場の確保、潮位変動によって喪失する橋下クリアランスによって運行ができなくなる船の時期、時間帯においてもその運行を可能にする代替ルート、としても役立つ）・水を生かす制度や仕組みの柔軟な運用

② 都心文化軸

● 既存の集積を活かした新たな文化軸の形成と多種多様な個性的文化拠点の配置

中之島やその周辺には、多くの既存の文化施設に加え、中之島西部には市立近代美術館計画があり、また福島一丁目では朝日放送新社屋やコンサートや演劇などに利用できる多目的ホールの整備が進む。中之島だけに留まらず、東は大阪城周辺から、西は食文化拠点としてミュージアム化が期待される大阪中央卸売市場、臨海部のUSJ、天保山の海遊館に至るまで、大川、堂島川、土佐堀川、安治川に至る河川沿いの東西軸一帯に点在する。これらを、優れた文化的情報発信機能を備えた装置にリニューアルまたネットワークさせていくことで、その文化力はさらに高まっていく。

● カルチャー・フロント機能の必要性

魅力あるコンテンツを創造し続けるには施設集積に加え、それを支える人材の育成や新たなコンテンツを実験的に発信するカルチャー・フロントとしての機能が備えられていることが不可欠。

その候補地はかなり存在する：中之島周辺、その西側に広がる安治川沿いおよび川口居留地や江之子島周辺（この周辺はかつて大阪港発祥の地として水上輸送の要衝であったが、現在は物流、倉庫として利用されている場所が多い。また有効に活用されていない場所も多い）。このように、グレーター中之島の西部、臨海部との結節点を社交都心大阪のカルチャー・フロントとして位置づけ、倉庫のコンヴァージョンなどによって次代を担う若きクリエイターの集積をはかることもよい。（例：NYのソーホー、ロンドンのバトラーズワーフなど）

● 民間の役割

欧米や、東京の六本木ヒルズの例のように、公共とともに民間も人材の育成、拠点の形成などにノウハウも活かし文化サプライヤーの役割を果たすことを期待する。

③ 複合機能都心

社交都心に求められる最も重要な要素とは、同じ場所で多様なアクティビティが凝縮して同時多発的に起こりえることにある。文化、芸術、業務、商業、居住などあらゆる機能が混ざり合うように集積、隣接していれば、バリエーションあふれる多様なアクティビティがそこで展開される。これらを水都計画によるネットワーク化や、中之島から川を超えて伸びる歩行者ネットワークなどにより結びつけることにより、中之島および川を挟んだ一大複合機能都心として発展させていく像が描かれる。他方、大阪都心に欠けている知的な機能の集積も必要。これらの構想を実現するには導入すべきプロジェクトを付加していく必要がある。その場所として利用可能な公有地も存在する：旧扇町高校の跡地や、江之子島の産業技術総合研究所跡地（旧大阪府庁跡地）など、いくつかの大規模な公有地が残されている。

7. 21世紀都市に向けた発想の転換

- 他人の土地に絵を描く
- 都市の理念から実現の方法を考える
- 都心経営体としての地区経営とタウン・ガバナンス

複合的で高度な都心機能を備えた都心をマネジメントしていくためには、単に維持管理のためという発想から地区の価値を最大限高めるという発想での地区経営とタウン・ガバナンスが必要。

（地区経営に関連する様々な組織的動き）

アメリカやカナダの「B I D」、イギリスの「T C M」を参考に、わが国で、タウン・マネジメント、エリア・マネジメントといった試みが展開されている。例：「汐留地区街づくり協議会」「みなとみらい21街づくり協議会」、大手町・丸の内・有楽町地区の「まちづくり懇談会」、地権者、立地企業、住民などが連携する「代官山ステキな街づくり協議会（代スキ会）」、大阪でも「中之島まちみらい協議会」などいくつかの動きあり。

- 国際的な都市間競争を見据えた選択の岐路に立つ大阪

世界的都市間競争の中で大阪が世界に誇れる大都市として存続しうるため、グレーター中之島がその中枢として役割を担うには、アクションを起こすこと以外に選択の余地はない。障壁は多くともすぐに着手しなければならないプロジェクトも少なからずある。構想づくり、組織づくりからはじめ、今すぐにでも息の長い活動をスタートさせる必要がある。

今、大阪は将来を決める重要な岐路に立っている。